

内容的類型学の概要¹

I. 基本的概念

内容的言語類型学の主張

§1 内容的言語類型学 とここでいっているのは、ロシア及び旧ソヴェト時代を通じて研究され、1950年代以降にクリモフによって集大成された、いわゆる「内容的類型学」*contentive typology* *контенсивная типология* のことを指している。

簡単にいえばこれは次のことを骨子として主張するものである。

- a. 言語は意味上の主語・述語・目的語関係のあり方によっていくつかの類型に分類することができる。
- b. この主語・述語・目的語関係は、当該言語の構造のヒエラルキーの最上層をなし、これに従って他の諸階層の構造が決定される。
- c. このようにして分類された言語類型は、他の言語類型に変化し得るが、その発展は一方向に限られ、逆行することはない²。

a. で述べている類型には、現在のところ「活格言語類型」*active languages языки активного строя*、「能格言語類型」*ergative languages языки эргативного строя*、「対格言語類型」*accusative languages языки аккумулятивного строя*が区別されている。対格言語類型には「主格言語類型」という用語を用いる人々もいるが、「活格言語」及び「能格言語」が、いずれも有標的な項の名に基づいて命名されていることからすれば、有標的な項である「対格」を用いる方が良いと思われる。

§2 また c. で述べられているのは、活格言語は能格言語に発展し、能格言語は対格言語に発展する方向性をもつこと、この逆方向の発展はないこと、を主張するものである。ただしクリモフも認めているように、活格言語が必ずしも能格言語を経ることなく、直接に対格言語に発展する可能性もあり、印欧諸言語はまさにこのばあいには当たっているとする。

それでは活格言語の前の段階は何かという問題については、たとえばバントゥー諸語に見られるような「多分類言語」*class languages* がこれであったのではないかとする説が有力であり、これに関連してこの種の言語の研究が盛んになりつつある。対格言語の後の段

¹ 京都ドイツ語学研究会報告(於関西ドイツ文化センター) 1996年12月14日。

² クリモフの所説については、[29][30][31][32]参照。

階については、未だその例が存在しないために、どのような原理に基づくものとなるのかはなお不明であって、憶測を許すのみである。

主張の b.、すなわち主語・述語・目的語関係が言語類型の基本的な関係であって、当該言語の他の階層は、この基本的原理に基づいて構造化されているということ、また同時に主張の c. すなわち言語類型は発展し変化するということ、すなわち言語現象が一つの continuum であるということから必然的に来由するのは、一言語の種々の階層には、基本原理となる関係から論理的に導かれる諸現象(これを**包含事象** implication импликация という)とならんで、包含事象ではないが、ある言語類型にはしばしば随伴して認められる諸現象(これを**随件事象** frequentalia фреквенталия と称する)が混在するというものである。

§3 したがって所与の類型に属する言語の基本的構造は、包含事象によって決定されると考えられる。これに対して基本的原理から論理的に演繹できないにも関わらず、特定の類型にしばしば認められるところの随件事象は、当該言語の所属する類型の前の段階に当たる類型、もしくは後に来るべき類型の包含事象と考えられる。この随件事象の存在によって、我々は言語の内容的類型が発展し、変化するものであることを知ることができるのである。印欧語も歴史に登場したときから、数多くの随件事象をともしつつも、すでに対格言語の特徴を備えていた。そしてその特徴はいまなお、基本的には引き継がれている。このように言語の類型の発展は極めて緩慢であって、同一言語の歴史において類型の変化を観察できるものは未だ知られていない。

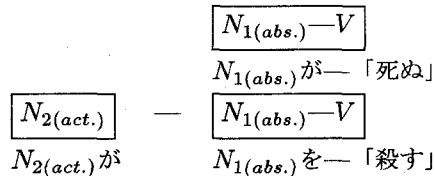
このことから、同一言語の歴史においてその類型上の変化を辿ろうとすれば、比較言語学の方法によらない訳にはいかない。そしてそれは現在のところもっとも良い条件をもっている、印欧語において他にはない。イヴァーノフ、ガムクレリゼその他の学者達などが印欧語比較文法を熱心に研究しているのは、このためである。

言語類型の内容

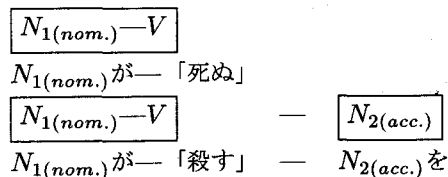
§4 **活格言語**は森羅万象を生き物であるか生き物でないかに分類することをもってその原理とする言語類型である。この種の言語では文の中心をなすのが述語であって、その述語が成立するために不可分と考えられる事象がこれに添えられる。たとえば「死ぬ」という述語が存在するとき、この述語は何らかの対象の上に「死」なる過程が生じ、やがてその過程が完成することを予定している。この対象を仮に A とすれば、A を指す名詞が「死ぬ」に添えられ、両者は緊密な結合(シンタグマ)をなす。もし「A が死ぬ」という事態が A 以外の対象、たとえば B の行為ないし働きかけによって生じると認定されるときには、B を表す名詞は、それが行為者であることを明示したうえで、さきのシンタグマに添えられる。

こうしてできた二次的なシンタグマは、「*B*が*A*を殺した」と解釈される。ここで「殺した」という「行為」は、「死ぬ」という過程がそのうえに起こる対象なしには存在し得ない。しかし逆に*B*の存在は「死ぬ」という過程にとって必須のものではない。帰するところその存在は認定の問題にすぎないのである。呪咀が有効であると信じられている文化・社会的環境においては、遠くはなれた場所において密かに呪咀を行った人物こそ、*A*を死に至らしめたその人でなければならないのである。

§5 したがってこのような言語においては、「死ぬ」と「殺す」は同一の事態であると観念される。自動詞と他動詞の区別が存在しないのである。重要なことは、対象が生き物であるかないか、行為者と考えられるか否かなのである。従って文法的性は「生物」、「無生物」の2種に分れ、「生物」性は「行為者」(活格)と「無規定」(絶対格)のいずれかの格を取る。「無生物」性は当然ながら「非行為者」であるから無規定の格しかもち得ない。さらに行為者が常に非行為者と区別されているから、この種の言語には「受け身」が存在し得ない。「受け身」が存在できるのは、行為者と非行為者の区別がない場合である。この種の言語に内在的な動詞のカテゴリーは、行為動詞および生物に関する状態動詞の類と、生物に関しない、あるいは生物・無生物の区別に関与しない状態動詞の類になる。



§6 対格言語というのは、行為を受けるか否か、言い換えれば行為の「被行為者」かどうかの問題とされる類型である。この種の言語においては、生物・無生物の別が無規定であるから、そのいずれを表す名詞も行為と結びつくことができるが、「被行為者」を明示した名詞をとまうことができるのは、ある種の述語に限られる。ここから動詞は「自動詞」と「他動詞」のカテゴリーをもつことになる。すなわち、



この種の言語では「主格」に立つ名詞は、「行為者」・「非行為者」に関して無規定であるから、対格に立つ名詞を主格に変換することは可能である。すなわち「受け身」が可能になるのは、この類型においてである。

§7 能格言語というのは、対格言語と活格言語の中間にある言語段階であると考えられ、その原理は行為者であるか否かであると思われる。したがってこの言語においてはシンタグマの形式は活格言語に等しい。生物・無生物のカテゴリーは、この言語では暗黙の前提とはなっているにせよ、もはや基本的な原理ではないから、動詞は活格言語の状態動詞のうちの生き物に関係するものも、行為動詞を主体とする、いわゆる「能格動詞」に対立する「絶対動詞」に移行し、対格言語の「自動詞」と「他動詞」の分類に近いものとなっているが、諸家の指摘するように、なお完全に自動・他動の分類には至っていないとみられる。たとえ自動詞であっても、たとえば移動の動詞 *verba movendi* など、生き物の基本的な行為を表すものは、未だ能格動詞に含まれているからである。

この言語も、「行為者」を表すものが有標的な格をとるから、「受け身」を作ることができない。

§8 いま、意味的に行為を他に及ぼす者をあらわすものを $A(ctor)$ 、そうでないものを $S(subject)$ 、被行為者を $P(atient)$ としてあらわせば、活格言語および能格言語は S と P とが同じ無規定の絶対格をとり、 A が有標的な活格または能格を取るのに対し、対格言語では S と A とが主格の形を取り、 P のみが対格という有標的な格を取るということになる。

活格・能格言語	A	—	$S = P$
対格言語	$A = S$	—	P

ここからピヴォット *pivot* という、興味ある現象がみられることになる。角田 [3] によれば、英語の等位構文のばあい、

- a. $Nancy(S)$ went and $[Nancy(A)]$ slapped $Diana(P)$.
- b. $Nancy(A)$ slapped $Diana(P)$ and $[Nancy(S)]$ went away.

のばあい、後続の節および先行の節の $Nancy$ は、 S と A または A と S であるから省略可能である。英語が対格言語に属し、したがって $S = A$ となるからである。これに対し、

- c. * $Nancy(S)$ went and $Charles(A)$ kicked $[Nancy(P)]$.

は $A \neq P$ であるために省略すれば非文になる。

§9 逆に活格あるいは能格類型に属する言語では、a. および b. の文の括弧の中を省略すれば非文になり、c. の文の省略のみが可能となる。

たとえば、能格型(活格型?) とされるオーストラリア東北部のワログ語では、次のような現象がみられるという。

- d. $pama + \emptyset yani + \emptyset warrngu + ngku$ [$pama + \emptyset$] $palka + lku$.

「男・絶対格 行く・過/現 女・能格 [男・絶対格] 殴る・目的」＝
 「男(S)が行って、女(A)がその男(P)を殴った。」(動詞の目的形は、従文において目的、結果、次に起こったことなどを表すという。)

- e. warrngu+ngku pama+∅ palka+n [pama+∅] yani+yal.
 「女・能格 男・絶対格 殴る・過/現 [男・絶対格] 行く・目的」＝
 「女(A)が男(P)を殴って、その男(S)が行った。」

これに対し、次の文は非文になる。

- f. *pama+∅ yani+∅ [pama+ngku] warrngu+∅ palka+ lku.
 「男・絶対格 行く・過/現 [男・能格] 女・絶対格 殴る・目的」＝
 「男(S)が行って、男(A)が女(P)を殴った。」[4, pp. 156-157]

II. 比較文法における内容的類型学的应用

§10 ガムクレリゼとイヴァーノフの共著になる『印欧語と印欧人』[27]は、内容的類型学の結果を、印欧語比較文法に応用しようとした最初の体系的な試みである。これは全2巻からなり、第1巻はローマン・ヤーコブソンの序文並びに「言語体系と通時言語学の諸前提」と題する短い導入部に引き続いた第1部が収められている。第2巻に収められているのは「印欧共通語における意味的に分類した語彙」を取り扱った第2部である。これはいわゆる linguistic palaeontology をその対象としている。この著書の概要を知るために記せば、第1巻の内容は次のようになっている。

第1編

印欧共通語の音韻体系と形態論

第1章 印欧語破裂音の3系列。連合論と統合論

1. 印欧語破裂音の3系列と唇音類の不完全性
2. 印欧語破裂音の3系列の類型学的解釈
3. 音韻結合論と印欧語の相異なる系列の結合規則
4. 有声音及び無声音系列の音韻の異音の分布
5. 指定された音韻体系の通時的導出可能性と印欧語の歴史上の諸方言における音韻変化の軌跡

第2章 印欧語破裂音の調音類と摩擦歯音。連合論と統合論

1. 子音の調音類の音韻論的特徴

2. 印欧語の「喉音」の調音類
3. centum 語群と satəm 語群の問題
4. 印欧語の歯擦音の体系
5. 印欧語の燥音(破裂音、摩擦音)の体系と、カルトヴェリ(南コーカサス)語、ア
ブハジア・アディゲ語、セム語など、類型学的に近縁な諸体系との構造的比接
6. 語根における破裂音の調音類の結合性の原理と印欧語の子音結合の構造

第3章 印欧語における母音体系と形態論的交替。ソナントと「ラリングル」

1. 印欧語の母音体系と母音交替のメカニズムの発生
2. 印欧語後期におけるソナントと「ラリングル」の体系

第4章 印欧語の語根の構造

1. 語根形態素の規範的形式
2. 複合語幹の構造的タイプ
3. 再構成された印欧共通語の形態論的構造の類型

第2編

印欧共通語の文法体系の分析

第5章 活格言語としての印欧祖語

1. 印欧共通語の文法構造の二元性。名詞諸カテゴリーの二元的構造
2. 印欧語の名詞パラダイムの起源
3. 印欧語における所有の表現方法
4. 印欧語の代名詞の体系の二元性
5. 動詞諸カテゴリーの二元性
6. 印欧祖語の活格類型

第6章 印欧共通語の文法的統語論の類型

1. 印欧語における文の核の統語構造
2. 印欧語の動詞の構成における、SOV 文型をもつ言語の構造的包含事象
3. 「version」という関係の類型と、印欧語のメディアウム
4. 印欧語動詞の語形における位置の構造

5. 印欧語の名詞の構成における、SOV 文型をもつ言語の構造的包含事象
6. OV および VO 構造をもつシンタグマにおける内的統語関係
7. 印欧語における単文の構造

第3編

印欧共通語の地域的構造

第7章 印欧語の言語領域の分化

1. 印欧語の歴史的諸方言の形成
2. 印欧語諸方言のグルーピングの方法としての文法的等語線 isogloss
3. 印欧語の方言的群化の時期の年代的順序
4. 印欧語諸方言の分化の反映としての文法的等語線に対応する音韻的等語線
5. 印欧語の言語的統一体の分化を反映するものとしての語彙的等語線

印欧語の破裂音

§11 従来一般に認められてきた印欧語の破裂音の体系は、よく知られているように、次のようなものであった。

I	II	III
(b)	bh	p
d	dh	t
g	gh	k
g ^w	g ^w h	k ^w

すなわち有声無気音、有声有気音および無声無気音の三つの系列と、調音部位による、唇音、歯音、喉音、喉唇音の四類である。このうち喉唇音 labio-velares といわれるのは、調音部位というよりは、二重調音による音類である。しかし以前から b の音韻の例はきわめて少ないことが指摘されていた。ガムクレリゼらも、この音韻をもつことが疑いない例は殆ど存在していないと述べている [27, p. 6]。

同書によればすでにペデルセン (Pedersen, Holger, 1867-1953) が、d および g をもちながら b を欠く言語がほとんどないこと、および t と k をもちながら p を欠く言語は多くみられることから、従来の I 系列と III 系列を入れ替えることを提唱したといわれる。ペデルセンはその際に、彼が提唱した体系は「前印欧語期」Vorindoeuropäisch に存在したものであって、印欧語共通語期 Gemeinindoeuropäisch には既に従来の体系に変化したと主張しているとのことである [27, p. 7]。

すなわち、ペデルセンの説は、従来の I 系列と III 系列を入れ替えた、前印欧語期の体系を考え、この体系の I 系列と III 系列とが入れ替わって、印欧語共通語期の音韻体系ができたと考えたわけである。

しかしこの仮説は前印欧語期の体系から、従来認められている体系、彼の用語でいえば印欧語共通語期の体系に、どのようにして変化したかを説明することが困難であること、言い換えればこの変化が通時的な類型学の規範に合致しないこと、ならびに印欧語共通語期の体系を従来のまま認めたことによって、結果的に理論としての新味がなく、したがって学界の承認を得ることができなかったという。いいかえれば、従来の体系は共時的な類型学の規範には合致しない点をもってはいたが、通時的な類型学の規範は満たしていた。ペデルセンの説は共時的な類型学の規範に合わせようとして、通時的な規範から逸脱することになったのである。

§12 ガムクレリゼらによれば、グリーンバーグ (Greenberg, Joseph Harold, 1915-) [10][11]、メリキシヴィリ (Меликишвили, И.Г.) [33]、キャンベル (Campbell, L.) [7] などの研究によって、有声音と無声音が対立する破裂音の体系においては、有声音のなかで喉音 g が有徴的な項であり、唇音 b が無徴的な項であるのに対し、無声音のばあいには逆に唇音 p が有徴的な項であり、喉音 k が無徴的な項であることが、明らかになっているという [27, p. 9-10]。また系列としては、最も無徴的なのが無声無気音であり、無声有気音、無声声門閉鎖音の順に有徴性が高くなるという [27, p. 11]。

この二つを合わせれば、最も有徴性の高いのは唇音の無声声門閉鎖音 p'([ʔp]) であるということになる。

類型学的な観点からの従来の体系のもう一つの問題点は、ヤコブソン (Якобсон, Роман Осипович, 1896-1982) [17] が指摘しているように [27, p. 11]、無声有気音がないのに有聲有気音が指定されていることである。有聲有気音が存在して無声有気音をもたないような言語は存在しないというのである。

またガムクレリゼらによれば、ジュクワ (Jucquois, G.) [18] は印欧語の語根における破裂音の系列ごとの出現頻度を、次のようにしているという [27, p. 14]。

I	系列	6.2 %
II	系列	8.9 %
III	系列	17.7 %

もし I 系列を有聲無気音であるとすれば、これに対する有聲有気音が有徴的な項であるから、I 系列の方が II 系列よりも出現頻度が多くなければならない。

このような共時的類型学の結果と、従来の体系の b にあたる音韻をもつ確実な例が見られないことを考え合わせて、ガムクレリゼらは、系列 I を無声声門閉鎖音、系列 II を有聲有気音、系列 III を無声有気音とする体系を提案している [27, p. 15]。すなわち、

I	II	III
(p')	b ^h	p ^h
t'	d ^h	t ^h
K'	G ^h	K ^h

ここで大文字で表しているものは、喉音と喉唇音の両方を表している。これは喉音と喉唇音の区別が、地域的なものにすぎないと判断されているためであるらしい。このばあい、有声有気音あるいは無声有気音に対応する無徴項である、有声無気音と無声無気音が欠如している。ガムクレリゼらによれば II 系列と III 系列は有気、無気の対立ではなく、有声無声の対立であるから、有気、無気は非弁別的な特徴であるということになる。すなわち II 系列の有気成分は有声の破裂にともなう、一種の有声の「ささやき声」 *murmured release* であると考えるのである。同じように III 系列の有気音も、付随的、非弁別的なものであると考える。そうすれば、印欧祖語においては有気、無気の対立は、位置による変異 *allophone* にすぎないことになる。

以上を総合すれば、印欧祖語の破裂音の体系は、結果として次のようになる [27, p. 14-16]。

I	II	III
(p')	b ^h /b	p ^h /p
t'	d ^h /d	t ^h /t
K'	G ^h /G	K ^h /K

このように、I 系列を声門閉鎖音とする、ガムクレリゼらの仮定は、ジュクワの結果とも一致することになる。

§13 このような体系は、「声門説」 *glottal theory* と呼ばれているらしい。ガムクレリゼは1987年に『言語学の諸問題』誌上に発表された論文、「声門説、印欧語比較言語学における新たなパラダイム」において、自己の体系を大文字で始まる「声門説」 *Глоттальная теория* として言及している [28]。この説がこのような名称をもって呼ばれるようになったのについては、この体系において指定された声門閉鎖音の系列の存在が、強烈な印象を与えるためであるとみて、ほとんど間違いがないと思われる。この強烈な印象から、この体系に対する反発が生じるのも、また予期されるところである。事実、上述のガムクレリゼの論文は、このような批判に対する彼の反論となっている。

彼によれば、その中の基本的なものは、原理に関するものであり、これが「比較言語学的再構成」ではなくて、「類型学的再構成」であるとするものであるという。これに対して、ガムクレリゼは、「原理的に比較あるいは内的比較による再構成に対立するような類型学的再構成なる手続きは存在しない」 [28, p. 27] とし、「どのような言語の再構成も、比較の資料に基づかなければならない」と主張する。そして「.....同時に比較及び内的

比較による再構成に基づいて措定することを得た言語体系は、(共時においても、また通時においても)類型学的な蓋然性を考慮しなければならない。別言すれば、比較による再構成は、類型学およびランゲージ・ユニヴァーサルと手を携えて行かなければならないのである。……したがって通時言語学において我々が語らなければならないのは、若干の場合に、祖語の諸モデルの内的比較による再構成によって補足される、比較言語学的な再構成に尽きるのである。一方類型学とランゲージ・ユニヴァーサルとは、実はあれこれの再構成の妥当性を検証するクリテリアにすぎない」(ibid.)と述べている。これに対して従来の体系については、彼は次のような評価を与えている。

「印欧語の破裂音の初原的な体系を、従来示されていたような形で、最初から措定すべきではないと、我々には思われる。このようなモデルが、当時模範とみなされていた古代インド語の体系の影響下に、また比較言語学の創始者たちに再構成の厳密な方法論が欠けていたことと関連して、純粹に歴史的な偶然によって条件づけられていたからである」[28, p. 28]。

このような、いわば「サンスクリット中心主義」は、印欧語比較文法の成立そのものの中に存在していたことは、疑いのないことでもあり、また無理からぬことでもあったと思われる。サンスクリットの破裂音の体系が、もっとも印欧祖語の体系をよく継承しているものとみなされてきたのも、この意味では、当然の論理的帰結であったろう。

しかし一方たとえそうであったにしても、比較文法のそもそものはじめから見慣れ、操作の対象としてきた語の形が、大幅な変更を迫られるというのは、感覚的に耐え難い思いをすることも、また事実であろう。ガムクレリゼらの体系に対する反発の底流には、このような思いが伏在しているように、思われてならない。

§14 「声門説」に対する第二の反論として、この体系には声門閉鎖をともなう歯擦音が存在しないというものがあるという。これに対してガムクレリゼは、ランゲージ・ユニヴァーサルによる論理的包含関係は、次のような形をもつという。すなわち、「もし声門閉鎖をともなう破裂音をもつ言語が、同時に歯擦音をもっているならば、歯擦音の系列の一つは、声門閉鎖もともなう」。したがって声門閉鎖をともなう破裂音の存在は、必ずしも歯擦音の存在を予定しないことになるというのである [28, p. 29 fn.]。

*b の音韻をもつ語形がきわめて少ないことと関連して、たとえばハイダー (Haider, H.) [12] のように、この音韻の所属する系列を有声の内破裂音と考えようとする試みも現れたという。ガムクレリゼはこれに対して、グリーンバーグが 1970 年に示したように、有声内破裂音の系列においては、有声無気音の系列と同じように、無徴的な項は唇音であり、有徴的な項は喉音であるから、問題の解決にならないのみならず、通時的に下位言語において有声無気音を導出することが困難であるとしている。

ネロズナク (Нерознак, Владимир Петрович, 1939-) [35] によれば、このような「声門説」は、ガムクレリゼ・イヴァーノフとは独立に、アメリカの若い印欧語学者ホッパー

(Hopper, Paul J., 1939-)[14][15][16]、およびメイエ (Meillet, Antoine, 1866-1936) の弟子のフランスのオドリクル (Haudricourt, André Georges, 1911-)[13] によって唱えられた。これを支持したのは、マイヤホファー (Mayrhofer, Manfred, 1926-)[21][22]、レーマン (Lehmann, Winfred Philip, 1916-)[19][20]、ポロメ (Polomé, Edger C., 1920-)、マルティネ (Martinet, André, 1908-) などであるという [27, pp. 15-16]。またボンハード (Bomhard, Alan R.)[6] は「声門説は今世紀において印欧語比較音声学に最も著しい寄与をなした。これにただ一つ比肩し得るラリンガル理論は、前世紀の 90 年代に創始されたものである」とし、ノルミール (Normier, R.)[24] もおなじくこれに高い評価を与えているという。

このように、いわゆる「声門説」はさまざまな反発にもかかわらず、徐々に同調者を増加させつつあると、いえるようである。

これに対して著名な印欧語比較言語学者のセメレーニイ (Szemerényi, Oswald, 1913-)[25, p. 12] は、*b は確かに語頭に現れることはほとんどないが、語中では、たとえばラテン語の *lūbricus līo*, ゴート語の *diups* のようにしばしば現れるとして、従来の体系を擁護しているという。

印欧語の語根の構造

§15 ガムクレリゼらの「声門説」によって、これまでその存在は知られていたものの、なぜそうなるかという理由がはっきりしなかったものに、説明が与えられることになる。たとえば印欧祖語の語根の音韻的構造について、メイエはいくつかの制限があることを述べている。その一つは、語根が有声無気音で始まり、有声無気音で終わることはない、すなわち De(R)D のようなタイプの語根は存在しないというものである [23, pp. 173-174]。

たとえば *bheudh- あるいは *g^wendh- のような語根はあるが、サンスクリットの *gádati* 「彼は言う」のように、*ged- を予想させるようなものは、サンスクリット以外にははっきりとした例がない、というのである。これがなぜであるのかは、従来の説では説明できないが、これをガムクレリゼらに従って T'eT'- のような二つの声門閉鎖音であると考えれば、このような語根が存在しにくいことは、音声的に発音がむずかしいことによって、説明することができる。

一方、メイエの指摘する第二の法則は、有声有気音で始まり、無声（無気）音で終わる語根、及びその逆の順序をもつ語根は存在しない、すなわち、D^he(R)T または Te(R)D^h のような形をした語根は存在しない、というものである。

これはさきに述べた声門閉鎖音の並立のばあいとは異なって、音声的に説明することがむずかしい。ガムクレリゼらはしたがってこれを印欧語の古い時代に生じた音声の同化によるものではないかとしている。その間接的な証拠として、彼は T^he(R)T^h あるいは D^he(R)D^h の形をした語根の出現頻度が、それ以外の形をした語根よりも大きいことを

挙げている [27, p. 20]。すなわち、かつての $T^{[h]}e(R)T^{[h]}$ あるいは $D^{[h]}e(R)D^{[h]}$ の形の語根と、 $T^{[h]}e(R)D^{[h]}$ あるいは $D^{[h]}e(R)T^{[h]}$ の形をした語根とが、ここに合流しているとするのである。しかしこれはあくまで推定にすぎず、現在のところ証明のできないことであるといわねばならない。

§16 また印欧語にはより一般的に、同一の破裂音が、同一語根内に並立することはない、という規則が知られている。たとえばバンヴニスト (Benveniste, Émile, 1902-1976) は、印欧語の語根の構造について、有声有気音と無声音を同時に含むばあいを除いて、それ以外の子音の同一語根内部の組み合わせは可能であると述べているが、それと同時に、同じ子音を含むばあいはこれから除外される、としている [5, pp. 170-171]。ガムクレリゼらはこれを、同一の調音位置をもつ音韻が同一語根内に並列しないという、より一般的な規則の特殊なばあいであるとしている [27, p. 18]。しかしこのより一般的な規則については、それがどういう理由によるのか、説明の必要があると思われる。ただし彼は「この法則は唇音、歯音、喉唇音の系列の破裂音を含む印欧語の語根の分析に基づいて導かれたものである」[27, p. 96]と述べ、これが一種の経験則にすぎないことを示している。

しかしこの規則には例外があつて、喉音のみは同一語根の中に並立できる。

たとえば、従来の体系による表記では、

*geig- : Arm. kc-anem 「突く」、Lit. gĩžti 「酸敗する」、gaizūs 「苦い」、gaĩžti 「苦くなる」、Alb. gjizë 「チーズ」、O.Ir. gér 「辛い、酸い」

*kaĥ- : Av. kasu- 「小さい」、Lit. (nu)kašėti 「弱まる」、Germ. hager 「瘦せた」

*kak- : Skr. śaknóti 「助ける」、Av. sačaiti 「できる」

*galg- : Arm. jalk 「枝」、Lit. žalgà 「長い竿」、Got. galga 「竿」

*gengh- : Skr. jánghā 「踝」、Av. zanga- 「足の骨」、Got. gaggan 「行く」、Lit. žengiù 「行く」

彼は本書の中で別項目をたて、印欧語比較言語学ではよく知られている喉唇音 labio-velar と口蓋化喉音の区別について、両者は喉音に二次的な特徴が加わったにすぎないとしているが、同時にこれらの例外をみれば、明らかにここに現れている喉音は喉唇音と口蓋化喉音の組み合わせになっている。彼はここから喉唇音と口蓋化喉音とは、調音位置の異なる音韻系列であると考えなければならないとしている [27, p. 97]。

以上のような留保をつけたとしても、もしもこのような一般法則が成り立つとすれば、このような説明は音声学的な性質に基づくものであるから、これが妥当するのは必ずしも一つの語根の内部に限られているわけではない、ということになる。印欧語の語根は、一般的に「子音+母音+子音」あるいは「子音+母音+ソナント+子音」または「子音+

母音＋ソナント」の形をしているから、上述の法則は、母音あるいはソナント、あるいは母音＋ソナントを隔てた二つの子音の間に成立する一般的法則の局所的な現れというべきである。これを仮に「間接的接触」とよぶことにする。

§17 ガムクレリゼらの体系によれば、系列 II と系列 III の子音については、有気、無気の対立は弁別的ではなかった。もしそうとすれば、次に問題になるのはどのような条件のもとで、有気あるいは無気の異音が見れるか、ということであろう。彼は基本的な異音、すなわちいわゆる archiphoneme は、有気音であると考えているようである [27, p. 21]。その理由として彼が挙げているのは、印欧語の再構成された語根の、音声的に独立した位置の大部分に有気音が見れるからであるという。しかし常識的に考える限りでは、有気、無気の対立するばあい、無徴的なのは無気音であると思われるから、この説明には疑問が残るといわざるを得ない。

それはともかくとして、彼はまず、同一語根内に系列 II の子音が並立するばあい、一方の子音は必ず無気の異音として実現されるという。これは共に有気音で実現することは、声門閉鎖音ほどではないとしても、発音に際して大きなエネルギーを必要とすることから、よく理解できる [27, pp. 22-23]。

またもしそうとすれば、たとえばギリシア語の *τριχός* 「髪・属格」と *θρίξ* 「同・主格」(< i.e. *drigh-) あるいは *ταχύς* 「速い」と *θάσσω* 「同・比較級」(< i.e. *dngh-) は、*drigh- と *dhrigh-、あるいは *dngh- と *dhngh- のように異なった二つの語根を指定するのではなく、*d^[h]rig^[h]- または *d^[h]ng^[h]- のように、同一の語根に含まれる同一の音韻の、「位置による異音」にかかわる現象であるとして説明できる。

またたとえばサンスクリットの *vidátham* 「指示」(< *vidh-atha-) にみられる、本来 *vidh- であるべきものが、*vid- の形をもっていることも、同じようにして説明できよう。

グラスマンの法則

サンスクリットとギリシア語に共通にみられる、いわゆる語根の重複において、語根の最初に立つ子音が有気音であるときには重複部分の子音は対応の無気音になるという、いわゆるグラスマン (Grassmann, Hermann Günther, 1809-1877) の法則も、本質的にはこれと同じ現象であるということになる。たとえばサンスクリット *dádhami*、ギリシア語 *τίθημι* 「置く」(< i.e. *dhē-)、サンスクリット *bíbharti* 「彼は運ぶ」、ギリシア語 *ἔσ-πι-φράναι* 「運び込む、閉じこめる」(< i.e. *bher-)³ のようなばあいである。

§18 グラスマンの法則によれば、二つの言語にみられる有気音の無気化は、それぞれの言語段階における平行的発展の現象であるということになる。このような見方は、祖形と

³この語はアリストテレスにみられるという。この語を含むギリシア語の現在形の重複については、[8, pp. 209-212] 参照。

して、たとえば *bher- における *bh のように、*b とは異なりこれと対立する、ただ一つの音韻を指定したことによる、必然的な論理的帰結だからである。すなわち、ギリシア語あるいはサンスクリットにおいて、bh の代わりに b が現れたとすれば、その変化は個々の言語の歴史の中に求められなければならないことになるからである。一方ガムクレリゼらの説に従えば、たとえば *bh と *b とは印欧祖語の時期には対立する音韻ではなくて、単なる異音にすぎず、それが各々の言語において音韻化したものであるということになる [27, pp. 23-24]。

このばあい問題になるのは、ガムクレリゼらの体系による、*D^[h]eD^[h]- が、どのような条件のもとに *DeD^h- となり、また *D^heD- になるかを明らかにすることであろう。彼は上に挙げた例などからも明らかなように、ギリシア語及びインド・イラン語においては、最初には無気音が、そしてあとの位置には母音あるいはソナントの前で有気音が現われるのが基本であると考えている。DeD^h- の形である [27, p. 22]。

これに対してイタリア語派あるいはゲルマン諸語のばあいには、逆に *D^heD- の形が基本であるという。

たとえば従来の体系で *bheidh- と表される語根は、ギリシア語では *πείθομαι* 「説得する」であって、*beidh- を予想させるが、ラテン語では *fidō* 「信じる、信用する」であって、*bheid- の形に対応している。同様に、ラテン語 *fiber* 「ビーバー」(<*bhi-ber-), サンスクリット *babhrúḥ* 「赤褐色の」(<*be-bher-); ラテン語 *fidēlia* 「土鍋」(<*bhid-), ギリシア語 *πίθος* 「陶器の容器」(<*bidh-); ラテン語 *habeō* 「持つ」(<*ghab-), サンスクリット *gābhastīḥ* 「手」(<*gabdh-) など [27, pp. 25-26] がある。

§19 よく知られているように、ラテン語は従来の体系での有声有気音を、語頭では *f または *h によって、語中では一定の条件のある時を除いて対応の有声無気音によって、それぞれ表している点で、「ケントウム語群に特徴的な状態からの重大な逸脱」[36, p. 28] を示している。すなわち、

I	II	III
*bh	f-,	-b-
*dh	f-,	-d(-b-)
*gh	h-,	-g(-h-)
*g ^w h	f-,	-u-

ガムクレリゼらの体系は、この問題を従来の説明よりも簡単に説明できる。語頭では *bh、*dh、*gh 等の異音が、語中では *b、*d、*g 等の異音が、それぞれ現れたと考えればよいからである。この点では、ガムクレリゼらの説の方が、優れているといえよう。しかしそれにもかかわらず、たとえば *ταχύς* と *θάσσω* の (すなわちガムクレリゼらの体

系によれば共に *d^[h]ng^[h]- に由来する) ばあいのように、同一の言語において *DeD^h- と *D^heD- が現れる条件は、ガムクレリゼらには明らかにされていないように思われる [27, p. 23]。

§20 詳しくは述べないが、系列 III に属する音韻も、上述の系列 II のばあいと同じように説明されている。すなわち、同一語根内に二つの系列 III の子音が並列するときには、系列 II のばあいと同じように、語派によってどちらか一方が有気音、他方が無気音として実現されるというのである。ただしゲルマン語派のばあい、*T^[h]e(R)T^[h] の形をした語根が、ともに有気音として実現される例がしばしばみられる。たとえば

Got. hēpjō 「部屋」, Av. kata, OCS kotiči 「部屋」

Got. faihu 「財産」, Lat. pecus, Skr. paśú 「家畜」

Got. þahan 「黙っている」, Lat. taceō 「黙っている」

これらは明らかにガムクレリゼらの仮定に反している。これらの形について彼は、たとえば梵語の kúpyati 「怒る」、ホメロスの ἀποκαπύω 「息をとめる」などは *k^huep- に由来するが、これがゴート語の afhwapjan 「消す」に対応するとし、また古アイスランド語 flaka 「(傷などが) 口をあける」にリトアニア語の plėsiu 「裂く」、アルバニア語の pëlçás 「裂ける」(すなわち *phēlk- の形が推定される) が対応するというように、語根のはじめに有気音、語根末に無気音が対応していた痕跡がみられるという。ただしこれを立証するには、例が余りにも少なすぎるような感じがする [27, pp. 29–30]。

バルトロメイの法則

§21 系列 II 及び系列 III の異音の現れ方を規定する条件の一つに、いわゆるバルトロメイ (Bartholomae, Christian, 1855–1925) の法則というものがある。これはもともと形態との境界において系列 III の子音に系列 II の子音が接するばあいに生じるもので、インド・イラン語派で Dh-T > D-Dh によって表されるものである。ギリシア語の地域においては、これは Dh-T > T-T となった。たとえば *bheudh- 「目覚めている」の零階梯の形 *bhudh- に *-to- を付加して作られる分詞は、サンスクリットで *bhudh-to- > buddhá- 「目覚めたところの」のようになるが、ギリシア語では *putto- > πυστός 「識れる」となる。したがってバルトロメイの法則が、インド・イラン語派以外に適用されるかどうかについては、懐疑的な研究者が多いようである [27, p. 33][1, p. 146]。

しかしこのばあいにも、ガムクレリゼらの体系によれば、D^[h]-T^[h] がインド・イラン語派では D-D^h になり、ギリシア語では T-T になったのは、有声、無声という特徴に関して前の子音に同化する、いわゆる順行性同化が起こったか、あるいは逆に逆行性の同化が起こったかの相違以外は、異音の現れ方の違いにすぎないことになる。そしてこれはま

た系列 II の子音同士、あるいは系列 III の子音同士が間接接触するばあいの異音の現れ方と同じことになる。ただし系列 II の子音同士、あるいは系列 III の子音同士の接触のばあいは、異音の現れ方は語末より語頭の方向に、いわば逆行的に及ぼされる。たとえば $*b^{[h]}ud^{[h]}-b^{[h]}is > bhud-bhis$ 。これに対して系列 II の子音と系列 III の子音との直接接触のばあいには（間接接触はこのばあいすでにみたように、同一語根の内部では生じない）、異音の現れ方は語根のはじめまでは及ばないという。たとえば、 $*b^{[h]}ud^{[h]}-t^{[h]}- > *budh-th- > *bud-th > bud-dh-$ のようになる。

したがって、ガムクレリゼらの体系を採用すれば、バルトロメイの法則に示される現象は、インド・イラン語派にのみ生じた現象ではなく、印欧語共通基語において生じた、より一般的な法則の、特殊な現れということになる [27, p. 32]。

通時的变化 — グリムの法則とヴェルナーの法則

§22 共時的な類型学の観点からは、ガムクレリゼらの体系はそれなりの説得性をもっているように思われるが、問題はこの体系が通時的な類型学の規範を満たしているかどうか、言い換えればこの体系の、各々の下位言語の体系への変化が、自然な形で説明できるかどうか、である。

印欧語において、他の語派に比べて閉鎖音に著しい特徴があるといわれているのは、よく知られているように、ゲルマン語派とアルメニア語のいわゆる音韻推移 Lautverschiebung であり、とくにゲルマン語派のばあいには、グリムの法則として知られているものである。ゲルマン語派のばあい、印欧語の無声無気破裂音は無声有気破裂音を経て無声の摩擦音になり、有声無気音は無声無気音に、また有声有気音は有声の摩擦音になったといわれる。すなわち、

$$\begin{aligned} *p, *t, *k, *k^w &> *ph, *th, *kh, *k^wh > f, \theta, \chi (> h), h^w \\ (*b), *d, *g, *g^w &> *p, *t, *k, *k^w & (= \text{Got. } q) \\ *bh, *dh, *gh, *g^wh &> *b, *ð, *γ, *γ^w & (= \text{Got. } b, d, g, g^w) \end{aligned}$$

§23 これに対してガムクレリゼらは系列 I の無声声門閉鎖音（従来の有声無気音）は声門閉鎖を失って無声無気音になったとする。また系列 II の有声音（従来の有声有気音）は語頭では無気の異音として、また語中では有気の異音として現れ、有気音は有気摩擦音に変化し、無気音は有声無気の破裂音になった可能性があるという。系列 III にも、同じことが起こったという [27, pp. 35–38]。すなわち、

系列	従来の体系	ガムクレリゼ氏の体系
I	*D	*T' > T
II	*Dh	*D ^[h] > D-, -D ^h - > D-, -ð-,
III	*T	*T ^[h] > T-, -T ^h - > T-, -θ-,

これは類型学的に可能性の高い考えであり、またたとえば *g^[h]erd^[h]- (従来の *gherdh-) が古アイスランド語で garðr 「屋敷」になり (cf. Got. gards 「家」、Skr. gr̥há- 「家」、*g^[h]ab^[h]- (従来の *ghabh-) が同じく古アイスランド語で gefa 「与える」、古英語で giefan (cf. Got. giban 「与える」、OHG geban、Skr. gábhastih 「手」、Lat. habeo 「持つ」) のような例をよく説明するものである [27, p. 37]。

§24 一方、二子音が母音あるいはソナントを介することなく直接に結合するのを「間接接触」に対して「直接接触」ということにすれば、両者は同じ法則の適用を受けるという。ガムクレリゼらによれば、ゲルマン語派では第 II 系列及び第 III 系列の子音は、他の語派とは異なって、第一要素が有気の異音を、第二要素が無気の異音をもって現れるという。たとえば、ラテン語 neptis 「孫娘」に対する古高地ドイツ語 nift-、ラテン語 octō 「8」、nox 「夜」 noctis 「同、属格」に対するゴート語 ahtau、nahts のようなばあいである [27, pp. 25-32]。

もしそうとすれば、ガムクレリゼら自身も認めているように [27, p. 37, fn.]、異音の現れについての上述の二つの説は、たがいに矛盾していることになる。またたとえば *d^[h]eig^[h]- (従来の *dheigh-) が古アイスランド語で deig 「ペースト」 (cf. Got. daigs、OHG teig) となるようなばあいをどう説明するのか、必ずしも明らかではないように思われる。

系列 III の無声破裂音 (従来の無声無気音) の場合にも、有気の異音と無気の異音とが考えられるが、有気の無声破裂音は摩擦音になり、*s および無声破裂音の後に立つ無気の無声破裂音は、系列 I に合流したという。この摩擦音はアクセントのある音節の直前あるいはアクセントのない音節の直後において有声化する。いわゆるヴェルナー (Verner, Karl, 1846-1896) の法則である。この法則によって有声化した摩擦音は、系列 II の有声摩擦音に合流することになったという。

§25 このようなガムクレリゼらの体系によれば、いわゆるグリムの法則の存在は否定され、印欧祖語の破裂音の体系が、その有声・無声という特徴に関してゲルマン語によく保存されていることになる。著者らの見解によれば、ゲルマン語派の破裂音の体系は、古形をよく保存しているということになるのである。すなわち、

系列	従来の体系	ガムクレリゼの体系		
I	D	T'	>	T
			↗	
III	(s-)T	(s-)T ^[h]		
III	T	T ^[h]	>	θ/ð (ヴェルナーの法則)
				↙
II	D ^h	D ^[h]	>	ð

印欧祖語の文

§26 印欧語の形態論について、ガムクレリゼらは印欧語は本来活格言語であったと考え、これに基づいて再構成を行っている。もとよりこの考えはガムクレリゼらの独断でも、また独創でもなく、ロシアにおける言語研究の成果に基づくものであるが、『印欧語と印欧人』においては、この背景についての説明が大きく欠けている。このことについては拙著[4]において述べてあり、若干の解説を加えてあるので、必要があれば参照されたいと思う。ここでは拙著において割愛せざるを得なかった多くの問題の中、いくつかのトピックに絞って述べておきたい。

ガムクレリゼらは、印欧語の古層においては

生物	無生物	動詞
----	-----	----

という語順が基本的であって、この語順は印欧語が対格言語に移行して後も、

$$S-O-V$$

という形で継承されていたとする[27, p. 320]。

§27 活格言語に対格言語のSOVにあたる語順が多いのは、この種の言語においてOとVとが密接な関係をもって第一次のシンタグマを作っているからであると考えられる。しかしこのシンタグマの関係は、必ずしも論理的にSOVの語順を導いていることにはならないであろう。要はOとVとが隣接していればよいのであるから、たとえばSVOでもVOSでも、あるいはOVSでも構わないわけである。これに対してVSOあるいはOSVはOとVとが離れて位置しているので、現れにくいと考えられる。逆に対格言語ではSVOあるいはOSV、VSOにくらべてVOSは現れにくいであろう。従ってこれらの文型のいずれが実際に多く用いられるかは、内在的なものにその起源を有してはいても、単なる出現の難易度に基づく傾向にすぎないといえる。

	対格言語		
	SOV	SVO	VSO
	VOS	OVS	OSV
	活格言語		

左のコラムは純論理的に最も対格言語に現れにくい文型であり、右のコラムは活格言語に現れにくいものであると考えられる。中央のコラムは活格類型、対格類型のいずれにも現れ得るものである。今これに加えて活格類型は

生物

無生物

述語

 という文型を基本とする、という条件をつけることができたとすれば、下の行の左の列にあるVOSはV-Oの形をもっているから活格言語の規範に合いにくい。また下の行の右のコラムにある

OSVはO-Vの順序をもっているから、対格言語に現れにくいことになる。中央のコラムの下に行のOVSも同様である。また対格言語が、活格言語の規範を最小限に修正して自己の規範を作るとすれば、SVOの形が最も自然である。そうすれば右のコラムの上に行にあるVSOの文型も、規範から外れることになる。頻度が低くなると考えられる所以である。

このように考えれば、これらの文型の出現頻度に相違があることは、理論的にも一応説明ができるように思われる。しかしこのことは同時に、文型が主語・目的語・述語関係そのものから、それだけによって論理的に導かれるものではないことをも示している。

§28 ガムクレリゼらは、SOVという文型を活格言語における基本的な文型、すなわち無徴的な文型と考えた上で、グリーンバーグらにならって[9]一般的に膠着語的性格、動詞のばあいの形態的要素の接尾、属格および形容詞的要素の前置、後置詞の存在などを、この言語の「包含事象」импликацияとしている[27, p. 325]。このимпликацияという用語は、グリーンバーグらのimplicationに対応したものであって、必ずしもクリモフのいう「包含事象」と同じものではない。クリモフのばあい、「包含事象」は基本的な関係から論理的に導かれるものであるのに対し、グリーンバーグあるいはガムクレリゼらのものは、経験的に措定されるものだからである。

たとえば関係詞 *Rel* と名詞 *N* および指示詞 *Dem* と名詞の前後関係は「論理的」には $2 \times 2 = 4$ 存在するが、その中のひとつが、現実の言語には認められない、とする。すなわち、

	<i>Dem + N</i>	<i>N + Dem</i>
<i>Rel + N</i>	+	-
<i>N + Rel</i>	+	+

いま、*Rel + N* を命題 *p*、*Dem + N* を命題 *q* とすれば、*N + Dem* は $\sim p$ 、*N + Rel* は $\sim q$ であるから、これが現実の言語においてその存在が措定されるか否かによって *T(True)* または *F(False)* の真理値を取るとすれば、次のような表が得られる。

	<i>p</i>	<i>q</i>	$p \wedge q$
1.	<i>T</i>	<i>T</i>	<i>T</i>
2.	<i>T</i>	<i>F</i>	<i>F</i>
3.	<i>F</i>	<i>T</i>	<i>T</i>
4.	<i>F</i>	<i>F</i>	<i>T</i>

これは明らかに包含関係 implication ($p \supset q$) を構成する。なぜなら implication は $\sim(p \wedge \sim q) = \sim p \vee q$ 、すなわち「*p* であって *q* でないものはない」ことを主張するものだからである(たとえば[26, pp. 44-63]参照)。しかしこの「包含関係」にはさきに述べたような、経験的要素が前提されていることを忘れるべきではないであろう。

§29 ガムクレリゼらも、このことはよく承知していたと思われる。彼は次のようにいう。

文の要素の線条的順序によって規定された構造的包含関係は、言語の表層構造にのみ関わる包含関係であって、実際に諸要素を相互に線条的順序にしたがって配置させることにしか関わってはいないことに注意すべきである。従ってこの表層的包含関係は、既に見たような言語の深層の諸関係と有契性をもっている包含関係よりも弱い。 $SOV \Rightarrow SVO$ あるいは逆に $SVO \Rightarrow SOV$ (並びにすべての可能なその変種)が、言語の深層構造の作り換えなしに生じる可能性がある。したがって、これらすべての改変とそれに関連した構造的変化は言語体系における本質的な発達を前提とするものではなく、一連の言語外的要因(基層、言語の相互影響)によって惹き起こされ得る[27, p. 325]。

ここでこのような議論に立ち入ったのは、語順というものの性質、およびこれと言語類型との関係を予め明確にしておきたかったからに、外ならない。個々の類型に固有の基本的関係のみから文型が演繹されるのではない以上、どのような文型が支配的であったかは、資料から帰納的に論証されなければならないのである。

複合語における文の語順の反映 — 目的語と述語

§30 複合語における構成要素の順序が、複合語の成立時における文の語順を保存している蓋然性は、かなりの程度に高いであろうと思われる。この観点からすれば、印欧語における意味上の目的語と動詞との関係は、 OV 型であったと推定される。たとえば、

サンスクリット

dhana-dā 「財産・与える(ところの)」、mādhu-pā 「蜜・飲む(ところの)」、bhū-pa 「国・守る(ところの)=王」

ギリシア語

βου-πόλος 「牛・牧する者」、ανδρο-φάγος 「男・食べる者=人喰い」、λυκο-κτόνος 「狼・殺す者」

ラテン語

signi-fer 「はた・運ぶ者=旗手」、au-spex 「鳥・見る者=鳥卜官」、ponti-fex 「道・作る者=神祇官、司祭」

スラヴ語

medv-ědi 「蜜・食べる者=熊」、čaro-dějī 「魔法・行う者=魔法使」

複合語における文の語順の反映—名詞と修飾要素

§31 意味上の目的語を表す名詞 O を修飾する要素 A は、1) SOV の文型が基本的であって、かつ 2) O と V との関係が密接であるような言語においては、 OAV よりも AOV の順

序の方が現れ易いであろうことは、容易に推察できる。前置である。

サンスクリット

mahā-devā 「大きい・神=シヴァ神」、priyā-sakhi 「可愛い・友人」、svā-sthāna 「自分の・場所=家郷」

ギリシア語

ἄκρο-πολις 「高い・町=アクロポリス」、μεσό-γαια 「間の・土地=内陸部」、ἀγρι-ελαίου 「野生の・オリーブ」

ラテン語

angi-portus 「狭い・通路」、lati-fundium 「広い・所有地=ラディフンディウム」、parvi-collis 「短い・頸(の)」 [27, pp. 348-349]

以上の中、修飾語+被修飾語が名詞となるものは、梵語学という「六合釈」ṣaṭ-samāsa (六つの結合) すなわち複合語の中の「持業釈」karma-dhāraya (作用を持つ) に当たり、形容詞となるものは、「有財釈」bahu-vrīhi (多くの・米を持つ) 当たるといふ [2, pp. 86-88]。

複合語における文の語順の反映 — 名詞属格

§32 名詞の属格も、前節に挙げたのと同じ理由によって被修飾語たる名詞に前置されることになる。

サンスクリット

nṛ̥-pati 「人の・支配者=王」、bhū-pati 「地面の・支配者=王」、artha-pati 「財産の・支配者=富豪、王」

ギリシア語

ῥοδο-δάκτυλος 「薔薇色の指を持てる(エーオース *Ἠώς* = 曙の女神)」、μεγά-θυμος 「大きな・気質の=勇敢な」、πολύ-μητις 「多くの知恵の=思慮深い(オデュッセウス)」

ラテン語

auri-comus 「黄金の・髪の毛」、sicc-oculus 「乾いた・目の」、magn-animus 「大きい・心の」

付属語

§33 ガムクレリゼらによれば、OV または VO の文型をもつもので、V と O の両方に関係する要素 *p* は V と O の中間に位置するという [27, p. 355]。これは仮定にすぎないが、極めてありそうな仮定であるといえる。もしそうとするならば、OpV の文型における要素 *p* は、O に対しては後置詞、V に対しては接頭辞の役割を果たす。また VpO のばあいには要素 *p* は V に対しては接尾辞、O に対しては前置詞となる。ガムクレリゼらが挙げているように、ラテン語の古形 portā ab iit 「扉(abl. sg.)・から・行く(perf. 3sg.) = 彼は扉から(出て)行った」のようなばあいがあり得るのはこのためである。この段階

において p と V との融合が進めば p は動詞前綴になるであろう。ガムクレリゼらは動詞接頭辞、augmentum e-、ゲルマン語の完了の ga- などがこれに当たるとしている [27, p. 357]。もしそうとすれば印欧語の動詞前綴の成立が $SOV \Rightarrow SVO$ の変化を前提としなければならないであろう。しかし印欧語がその姿を表したときには、未だこの変化が完全に生じていたとは思われない。これをどのように解するべきであろうか。

またもし p と O との結合が緊密になれば、 p は後置詞になるに違いない。このばあい、たとえば Menapii lēgātōs ad eum pacis petendae causā mittunt (Caes.) にみられる通りである。

ふたたびもし OpV の V と O の位置が変化したばあい、要素 p の位置が変わらないとすれば、 p は前置詞に転化するであろう。もしこれが動詞の人称語尾のばあいでもあるとすれば、これも augmentum e- などと同じ理由で、明証性を欠くように思われる。しかし p が O または V にともなわれて、 pVO または VOp となるばあいも考えられる。前者のばあいはたとえば abiit portā のような形になるとおもわれる。後者のばあいについてはガムクレリゼらには言及がないように思われる。

さらにまたラテン語に普通にみられる ā portā iit のような形は、 $OpV \Rightarrow VpO \Rightarrow pOV$ のような複雑な変化を前提とすべきなのであろうか。これも相対的な年代を考えれば、俄には信じ難い。いずれにせよ、類型学には未だ多くの問題が未解決のままに残されていることだけは確かである。

関係文献

- [1] 高津春繁,
『印欧語比較文法』(岩波全書) 東京 1954.
- [2] 榊 亮三郎
『梵語学』、京都、初版 1907(明治40) 第3版 1950.
- [3] 角田 太作
能格言語と対格言語におけるトピック性『言語研究』 Vol.90. 1986, p. 149 & seq.
- [4] 山口 巖
『類型学序説』 京都大学学術出版会 1995.
- [5] Benveniste, Émile,
Origines de la formation des noms en indo-européen, Paris, 1935.
- [6] Bomhard, Alan R.,
The Indo-European phonological system: New thoughts about its reconstruction and development, *ORBIS. Bulletin International de Documentation Linguistique*, 1979, t.28, No.1, pp. 66-110.
- [7] Campbell, L.,
On glottalic consonants, *IJAL*, 1973, v.39, No.1, pp. 44-46.
- [8] Chantraine, Pierre,
Morphologie historique du grec, 2-éd., Paris, 1967,
- [9] Greenberg, Joseph H.,
Some universals of grammar with particular reference to the order of the meaningful elements, *Universals of Language*, Cambridge, Mass., 1966, pp. 73-113.
- [10] Greenberg Joseph H.,
Language universals with special reference to feature hierarchies, The Hague-Paris, Mouton, 1966.
- [11] Greenberg Joseph H.,
Some generalizations concerning glottalic consonants, especially implosives, *International Journal of American Linguistics (IJAL)*, 1970, v.36, No.2, pt. 1, pp. 123-145.
- [12] Haider, H.,
The fallacy of typology. Remarks on PIE stop-system, *Lingua*, 1985, v.65.

- [13] Haudricourt, A.-G.,
Les mutations consonantiques (occulsives) en indo-européen, *Mélanges linguistiques offerts à É. Benveniste*, Louvain, 1975, pp. 267–272.
- [14] Hopper, Paul J.,
Glottalized and murmured occlusives in Indo-European, *GLOSSA. An International Journal of Linguistics*, 1973, v.7, No.2, pp. 141–166.
- [15] Hopper, Paul J.,
The typology of Proto-Indo-European segmental inventory, *The Journal of Indo-European Studies*, 1977, v.5, No.1, pp. 41–53.
- [16] Hopper, Paul J.,
Areal typology and the early Indo-European consonant system, *The Indo-Europeans in the Fourth and Third Millennia*, ed. by Edger C. Polomé, Ann Arbor, 1982, pp. 121–139.
- [17] Jakobson, Roman,
Typological studies and their contribution to historical comparative linguistics, Reports for the VIIIth International Congress of Linguists, Oslo, 1957.
- [18] Jucquois, G.,
La structure des racines en indo-européen envisagée d'un point de vue statistique, *Linguistic Research in Belgium*, Wetteren, 1966.
- [19] Lehmann, Winfred Ph.,
Proto-Indo-European phonology, Austin, 1952.
- [20] Lehmann, Winfred Ph.,
Reflexes of PIE $d < t'$, *Linguistics across historical and geographical boundaries*, v.1: Linguistic theory and historical linguistics, Berlin, 1986, pp. 483–489.
- [21] Mayrhofer, M.,
Sanskrit und die Sprachen Alteuropas. Zwei Jahrhunderte des Widerspiels von Entdeckungen und Irrtümern, *Nachrichten der Akademie der Wissenschaften in Göttingen*, 1983, Philol.-Hist. Klasse, No.5.
- [22] Mayrhofer, M.,
Indogermanische Grammatik, Bd.1, Halbband 2: Lautlehre (Segmentale Phonetik des Indogermanischen), Heidelberg, 1986
- [23] Meillet, Antoine,
Introduction à l'étude comparative des langues indo-européennes, 8-éd, Paris, 1953.

- [24] Normier, R.,
Indogermanische Konsonantismus, germanische "Lautverschiebung" und Verner-
sches Gesetz, *Zeitschrift für Vergleichende Sprachforschung (KZ)*, 1977, Bd.91,
Hf.2, pp. 171–217.
- [25] Szemerényi, Oswald,
Recent developments in Indo-European linguistics, *Transactions of the Philolog-
ical Society*, L., 1985.
- [26] Croft, William,
Typology and universals, Cambridge Univ. Press, 1990.
- [27] Гамкрелидзе, Тамаз Валерианович, Иванов, Вячеслав Всеволодович,
Индоевропейский язык и индоевропейцы, I, II, Тбилиси, 1984.
- [28] Гамкрелидзе, Тамаз Валерианович,
Глоттальная теория: новая парадигма в индоевропейском сравнитель-
ном языкознании, *Вопросы языкознания (ВЯ)*, 1987, No.4, pp. 26–34.
- [29] Климов, Георгий Андреевич,
Очерк общей теории эргативности, Москва, 1973.
- [30] Климов, Георгий Андреевич,
Типология активного строя, Москва, 1977.
- [31] Климов, Георгий Андреевич,
Типологические исследования в СССР. 20–40-е годы, Москва, 1981.
- [32] Климов, Георгий Андреевич,
Принципы контенсивной типологии, Москва, 1983.
- [33] Меликишвили, И. Г.,
*Отношение маркированности фонологии (условия маркированности в
классе шумных фонем)*. Автореферат кандидатской диссертации, Тби-
лиси, 1972
- [34] Меликишвили, И. Г.,
К изучению иерархических отношений единиц фонологического уровня,
ВЯ, 1974, No.3, pp. 94–105.
- [35] Нерознак, В. П.,
Индоевропейские языки, *Сравнительно-историческое изучение языков
разных систем. Современное состояние и проблемы*, Москва, 1981, pp. 8–
62.

[36] Тронский, И. М.,

Историческая грамматика латинского языка, Москва, 1960.